（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　　村上徳樹（むらかみあつき）

自己認識理論は、およそ 5 世紀末のインドにおいて成立した仏教認識論上の一つの理論である。この理論の一般的な解釈によれば、すべての知覚は外界の事物を対象とするのではなく、心的表象を直接の対象とするという。このばあい心的表象は外界の対象（元素構成物）に起因すると考えるのが経量部と呼ばれる学派の説であるのに対して、心的表象の原因をも心の内なる潜在印象に求めるのが唯識学派の自己認識理論である。いずれの学派も、心は内なる心的表象を直接に知覚するという心の自己認識理論を共通に認める。ただし、経量部は自己認識を通して外界対象が推知されることをもって一連の認識は完結すると考える。一方、外界の事物は心的表象の形成に関与しないとする唯識学派によれば、心の自己認識そのものが一連の認識の結果であるという。

以上のような自己認識理論はディグナーガによって提唱され、7 世紀のダルマキールティが仏教内外の論争をふまえてその理論に精緻な体系をもたらした。その後、ダルマキールティの著作に対する注釈家たちが考察をくわえ、さらに 11 世紀以降になると、仏教論理学・認識論を積極的に受容したチベット人の学僧によって議論が深められることになる。

村上氏の論文は、ゲルク派の開祖であるツォンカパの高弟の一人、ケードゥプジェ・ゲレクペルサンポ（1385-1438）による自己認識理論とこれに関連する唯識思想の解釈に焦点をあてる。氏は、『認識結果大論』『意闇除去論』『認識手段評釈大注』の３論書を直接の素材とし、ダルマキールティ作の『認識手段評釈』第３「知覚」章とその関連注釈文献、およびロントゥン等のサキャ派の論師との解釈上の比較を通して考察を進める。

論文は、第１部「本論」と第２部「『認識結果大論』*Tshad 'bras chen mo* の原典研究」とから成る。第２部は厳密に再校訂したテキストと詳細な訳注研究で、これ自体、国内外を問わず初めての本格的な研究であり、きわめて貢献度の高い成果と評することができる。

全体で６章から成る第１部の本論は、第２部の研究成果を基礎にしながら論を進め、冒頭の２章では、(1) ケードゥプジェ独自の自己認識理論解釈が思想史的な観点をもふまえて解明される。後半３章は、(2) 『認識手段評釈』の「知覚」章（第 301-366 偈）に展開される自己認識理論をめぐり、とくにそれが経量部・唯識派のいずれの学派の説に相当するかについて、従来の一般的な解釈とは異なる伝統がインドの一部の論師にも見られ、またケードゥプジェを中心とするゲルク派の中にも継承されていることを詳論する。これら２点に関する本論文の研究成果は大きく、今後のチベット仏教認識論の研究にとってもきわめて意義のある業績として高く評価することができる。一部にやや明快さを欠く論述はみられるが、本研究の画期的な意義を損なうものではない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値する業績であると判断する。